

成27年9月18日(木)

老球の細道165

努力＝使った時間配分量

会津バスケットボール協会 室井 富仁

以前同僚であった若い先生からすばらしい小冊子を贈ってもらった。「ことばの宝」がぎっしり埋まっていた。この先生は未来の福島県陸上競技会を引っ張って行く有能な指導者である。常に研究、研修を怠りなく色々なところから学ぶ謙虚な姿勢は見習うところ大である。何かためになる本があると、いつも送ってくれる。そして私も勉強させられる。

コーチは学ぶことをやめたとき、面倒になったときコートを潔く去るべきである。かのバスケットボール・コーチの神様ジョン・ウッデンは「明日死ぬかのように今日を大切に生きよ。永遠に生きるかのように毎日学び続けよ」と言っていた。

今回の贈り物は学び続ける上で絶好の指南書になった。その中に努力することについて、数学界のノーベル賞といわれるフィールズ賞をとった広中平祐(へいすけ)先生のことが書かれてあった。

広中先生は、「努力」を次のように定義している。「努力とは、他人以上に時間をかけること。回数をかけること」。先生がフィールズ賞を受賞する研究論文を書いていたのは、アメリカを代表し、世界の頭脳が集まるといわれるハーバード大学だった。先生はそこで鳥肌がたつほどの天才学者に何人も出会う。そうした天才に立ち向かうには、ひたすら時間をかける、つまり努力の天才になるしかないと覚悟し実践したという。

この話では、努力とは特別な人間しかできないことではない。血のにじむような苦しい思いなどしなくてもよい。ただ時間をかければよいのだ、回数をこなせばよいのだ(もちろん集中したうえでの話)と教えてくれる。まさにわが意を得たりとする内容であった。

レベルは低くなるが、私自身の努力ストーリーを述べてみたい。私は小さいころから努力とは無縁の世界で生きてきた。何をやるのにもそこそこまではできるが1番になれるものがない。何にでも興味を示すのだが、すぐに飽きてしまう。そんな私の負けだらけ、失恋だらけ、傷だらけの人生の中で努力をしたと自分で自分をほめてやりやいことが二つだけある。一つは高校時代のシュート練習である。当時韓国の天才シューターが一日千本打っているということをバスケットボール雑誌で読んで、500本位だったら私もできるだろうと朝から晩まで時間を見つけて打ち続けた。自分でも不思議なくらい続いた。2年たったら機械のように入るようになってしまった。そしてその後全国への道が可能になった。

もう一つは喜多方女子高校でクラスを持っていた時に書いた学級通信『ガッツ』である。入学式の挨拶で「通信を3年間毎日発行する」と爆弾宣言をした。そしてその通り一日も休まずに書き続けた。出張の日出張先からFAXで学校へ送った。おかげさまで、書く材料を探すために色々なことを見たり聞いたりすることができた。通信に書いた生徒の思い出は残っているが、当時のわが子の様子は記憶に残っていない。指導者は家庭(過程)より結果なのである。どこからか悪魔の声が聞こえてくる。「意気地(育児)なし!」。

バスケットボール選手がトップアスリートに成長するための素質は何か?身長?スピード?センス?残念ながら全部違う。最も大切なのは「努力することのできる」才能である。最近私の周囲に努力することのできる小学、中学生プレーヤーが現れてきた。この子たちはどこまで伸びるのだろうか。「楽シミ」というもう一つのシミが増えてきた。平成27